

[平成16年度普及に移す技術]

[普及に移す技術名]

ウメの灰色かび病の発生予察方法

[要約] ウメ「紅サシ」の灰色かび病は開花盛期(80%の花が開花した時期)から開花終期(80%花弁が落ちた時期)までの日数が10日以上になると発生がみられるようになり、日数が長くなるほど発生率が高くなる。開花盛期～終期まで10日以上経過するような年は発生の可能性が高いため警戒し、適期に薬剤防除する。

[キーワード] ウメ、灰色かび病、発生予察

[担当] 福井園試・果樹研究グループ

[連絡先] 電話 0770-32-0009 電子メール engei2@kl.mmnet-ai.ne.jp

[分類] 普及

[背景・ねらい]

ウメ果実の灰色かび病の発生は年次間差や地域間差があり、発生が少ない年は防除しなくてもよいが、多い年には発生果率が数十パーセントにも上り大きな被害となる。特に平成15年は大発生して、果実品質が大きく低下したが、開花期から4月の気温、降水量などの気象要因から予想する従来の予察方法では、発生を未然に防ぐことができなかった。そこで、発育ステージや気象条件から灰色かび病の発生条件を再検討し、有効な発生予察方法を確立する。

[技術の内容・特徴]

1. 灰色かび病は古いガク、花弁の裏側、果実間の接触部位に発生する。病斑には、果実全体に広がり落果する進展型病斑と直径7mm以内の病斑のまま拡大しない停止型病斑(写真1)の二つがある。進展型病斑は落果してしまうが、停止型病斑は収穫期まで樹上に残るので、選果や品質面で問題となる。
2. 現在のところ灰色かび病の発生について、開花期前後の気温や降水量などの気象条件との関係から発生予察する有効な手法はない(表1)。
3. 発育ステージとの関連では、開花盛期(80%の花が開花した時期)から開花終期(80%花弁が落ちた時期)までの日数が10日以上になると発生がみられるようになり、日数が長くなるほど発生率は高い(表2、図1)。
4. 開花盛期から終期まで10日以上経過するような年は発生の可能性が高いため防除の必要がある。2週間以上長引くと大発生するので警戒する。

[技術の活用面・留意点]

1. 3月下旬に園芸試験場の生育データをもとに灰色かび病の発生を予測して、農家や関係機関に情報を提供する。
2. 風通しが悪く湿度が高くなる園地では常発するので、毎年適期防除を心がけるとともに、園地の環境改善を行う。

[具体的データ]

表1 開花期の気象と灰色かび病発生率の相関

期間	気温	降水量	降雨日数	降雨日数率
開花始 - 終	0.63	-0.13	-0.09	-0.23
開花盛 - 終	0.20	0.14	0.47	0.11
開花後30日	0.41	0.08	0.01	0.01
4月	0.12	0.31	0.20	0.20

注) n=8 一次相関 10%有意水準は0.62以上

表2 ウメの開花と灰色かび病発生率の相関

開花期間			開花日数	
始	盛	終	始~終	盛~終
-0.55	-0.55	-0.55	-0.02	0.62

注) n=8 一次相関 10%有意水準は0.62以上



写真1 灰色かび病の停止型病斑

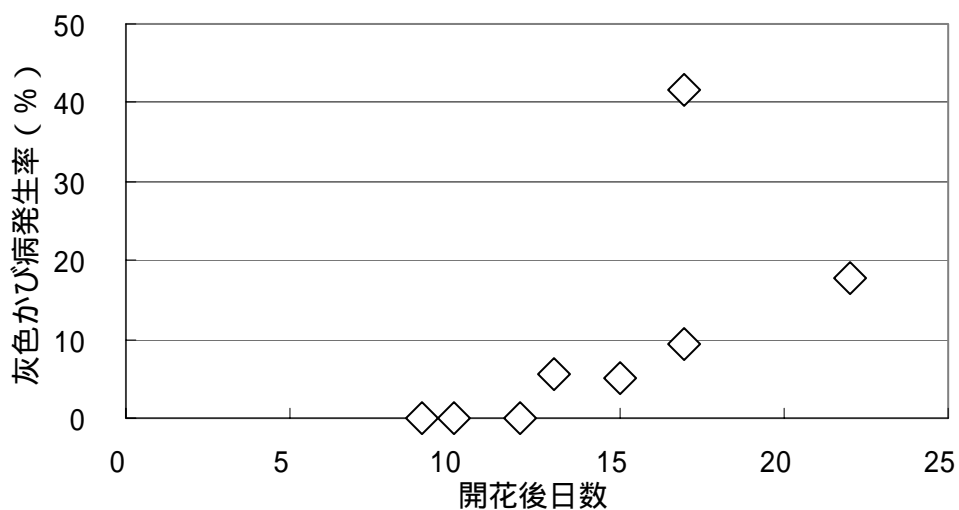


図1 開花盛から終期までの日数と灰色かび病の発生 (福井園試: 無防除樹)

[その他]

発表論文等: 2003年福井ウメシンポジウムポスター発表